

品川の漁業 ー品川浦と大井御林浦ー

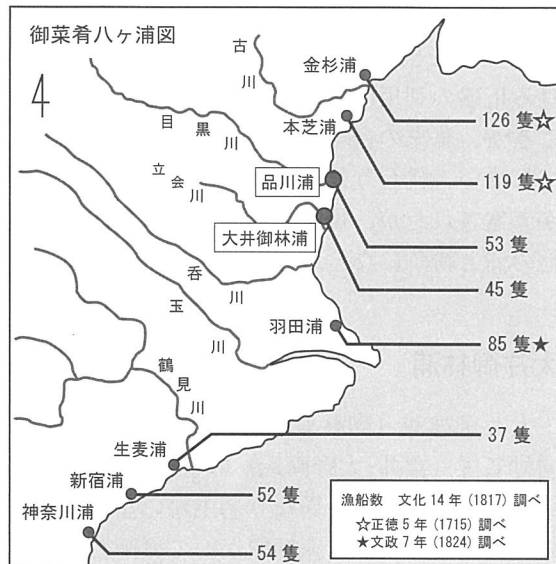
江戸湾の漁業

徳川家康が関東に入国した当時は、江戸湾沿いにいくつかの漁村があったが、都市として急速に発展する江戸の需要に耐えられるものではなかった。そのような中、上方の^{かみがた}猟師が移住して漁業権をとり、進歩した漁法を教えて関東漁業の発達的基础を築いた。この間、地元漁民との間に多少の摩擦が生じたものと思われるが、徳川幕府は移住者に様々な特権を与えて保護し、漁業の発達を一段と促進させた。その後、次第に移住者と地元が融合して江戸湾にいくつかの漁村が形成された。品川地域では、南品川^{おさいきかな}猟師町（品川浦）と大井村御林^{おほい}猟師町（大井御林浦）の2つの純漁村が形成され、江戸城に鮮魚を納める役目を負った御菜肴八ヶ浦のひとつとして発展した。

社明寄
神木



▲寄木明神社（『江戸名所図会』より）



御菜肴八ヶ浦は、北から、金杉・本芝・品川・大井御林・羽田・生麦・新宿（子安）・神奈川の8つの猟師町から形成されていた。このうち、金杉・本芝・品川の三ヶ浦が元締め役割を担った。八ヶ浦には月3度の献上が義務づけられていたが、臨時で献上することもあった。寛政4年（1792）からは鮮魚の献上が停止されて金納に変わったが、のちにお金とともに「獵初穂」と称して月1度ずつ鮮魚を献上するようになったのである。

品川浦

品川浦（南品川^{よりき}猟師町）は、南品川宿に属しながら、単独の統括者である名主（大島氏）がおり、村としての行政機能を備えていた。南品川^{よりき}猟師町は、南品川宿一丁目から目黒川に沿って突き出た地にあり、猟師共有の網干場があった。鎮守は寄木明神社（現、寄木神社）である。

現在、寄木神社の境内の一隅に「江戸漁業根元之碑」[昭和23年（1948）、本山荻舟^{てきしゅう}撰文]が建てられ、神社創建の由来と、御菜肴八ヶ浦の

総元締めであり、海苔養殖の本場として栄えた品川浦の歴史が刻まれている。

品川浦の漁で活躍したのが桁船である。これは、帆の力で横向きに走らせ、5～9挺の桁網（底引網）を引いて漁をするもので、品川浦における桁船の利用は他の浦より盛んであった。ところが、幕末の台場築造により漁獲高が減少してしまい、代わりに芝エビなどを獲るエビ桁網が考案されたが、規定の漁具でなかったために他の浦と紛争になった。

大井御林浦

大井御林浦（御林獵師町）は大井村に属し、同村名主（櫻井・大野両氏）の管轄下にあった。御林浦には品川浦と異なり名主がいなかったものの、品川浦同様に獵師頭がいて獵師たちを統括していた。

元治元年（1864）11月に金杉・本芝両浦が江戸町奉行所に提出した「浦方起立書上」（『芝金杉魚問屋御用留』に所収）には、御林浦成立の由来が記されている。それによると、万治2年（1659）に芝金杉東の海辺より約3町ほどの土地が御用地になり、因幡鳥取藩主池田光仲（松平相模守）が屋敷を拝領することになったため、先住の獵師6戸が大井村の御林町に代地を与えられて移転し、漁業を営んだので御林獵師町と呼ぶようになったとある。また、「因州組」と

唱えている猟師が、御林浦成立以来の旧家で芝金杉浦から分かれたものであり、この地の猟師たちが移転したことで御菜肴を献上するようになったと記されている。

御林浦は、南品川と浜川の間に鮫洲付近さめずにあり、鎮守は御林八幡社（現、鮫洲八幡神社）である。

漁獲物

天保14年（1843）の品川宿の明細帳には、品川で獲れた魚介類のリストが収録されている。それによると、^{こち}鯛・^{ひらめ}鰭・^{ざこ}芝海老・^{しらうお}沙魚・白魚・あいなめ・^{いか}烏賊・きす・うつぼ・石もち・小鯛・黒たる（鯛）・^{ほら}鰯・さより・^{かれい}鰺・ほうほう・あかえい・^{まぐわ}鱈の類、赤貝・蛤などが獲れた。

近代における漁業の衰退

品川における漁業生産は江戸時代から重要な地場産業であったが、近代化の波の中で衰退の一途をたどった。それは、漁場である東京湾、特に品川を含む内湾の変化や埋立の促進などによって周囲の環境が変転したことが原因であった。そして、昭和37年（1962）12月の内湾における漁業権放棄の決定によって、この地域の漁業は完全に姿を消したのである。

(朽船)

